敦賀市立博物館友の会

令和７年８月 第104号

博物館友の会だより

題字：千葉半厓

文化振興ニュース

特別展 つるがのみほとけ ご案内

本年度の特別展は、久しぶりに仏教文化財を中心とした展示となります。敦賀市立博物館ではこれまでも、「西福寺宝物展」（平成七・八・九年）「禅刹永建寺展」（平成十一年）「敦賀古寺宝物展」（平成十二年）などを開催してきました。これらの成果が他の展示に生かされたこともあり、また別の文脈で指定文化財の仏像にお出まし願ったこともありましたが、仏教関係に全振りした展示は実に二十五年ぶりとなります。これは引退を目前にした担当者が一回でいいから本格的な仏教関係展示をやってみたい、と専門でもないのにわがままを言いだして開催の運びとなった企画です。

この担当者が展示もおぼつかない新人であった頃から幾度となく、敦賀は戦災の被害が大きく文化財が残っていない、と前任者や有識者の先生方から聞かされていました。確かにそれは一面的には間違いではないのです。残念ながら戦禍に消えてしまった多くの文化財が存在していたはず。でも被害を免れた文化財、被害から遠く隔たっていたおかげで守られた文化財もたくさんあったことを、長い学芸員生活の中で出会いや発見を繰り返し、先達や仲間たちにも教えられ、これまでの一方的な認識を上書きできると確信しました。

さらに初めてのお寺やお堂にも調査に伺い、展示点数的には十点を超える新出資料を含めた構成で臨む特別展とすることができそうです。また物として展示する以外にも、調査を通してどのような信仰があり、それが今どうなっているか、今まで認識されていなかった問題を知ることもできました。こうした調査は特別展の後も粛々と続けてまいります。その道程は優れた文化財を掘り起こす以外の課題にも向き合うこととなりそうです。

もちろん許可を得て敦賀が誇る重要文化財もお披露目いたします。考古資料も仏教文化財として紹介します。ご宗派の枠を超えて、敦賀のみほとけたちと、先人たちが伝え続けてきた祈りを感じる機会となれば幸いです。

（担当・高早）

えぞいはぬ錦

～古代蝦夷・敦賀の昆布ロード～

友の会会長　川村　俊彦

本年三月二八日、「敦賀のおぼろ昆布加工技術」が国登録無形民俗文化財に登録された。これを記念し、五月に開催した友の会総会では、調査を担当した敦賀市文化・交流推進課の奥村係長より「昆布と敦賀」について講義を頂いた。そのさわりを紹介すると―、

昆布についての最古の記録は『続日本紀』霊亀元年（七一五）の条にあり、なるほど、そこには三陸地方の蝦夷からの昆布献上に関する記述が見られる。

中世には、安東氏の台頭による十三湊を拠点とした渡島蝦夷との交易を背景として、日本海側の昆布流通ルートが確立していた。室町初期の『庭訓往来』には全国の名産の一つに宇賀昆布（函館付近産の真昆布）が挙げられ、「越前ノ敦賀ニ着クト云ヘリ」と記されている。ちなみにこの頃敦賀に揚った昆布は小浜の商人によって、「若狭小浜の召しの昆布」として京方面へ流通したらしいことが、狂言の『昆布売』によって知られる。

近世になると蠣崎（松前）氏の蝦夷地経営と近江商人の活動により昆布の流入が増加。元禄一〇年（一六九七）の『本朝食鑑』には、松前昆布は敦賀に伝送し、敦賀より小浜へ伝送して若狭昆布と号すとある。敦賀で昆布加工業が盛んになるのは宝暦年間（一七五一～六三）まで待たねばならない―。

自余は割愛するが、このように昆布の歴史について多くを学ぶ機会を得た。ついては蝦夷・敦賀の交易ルートについて、筆者なりに思いを巡らしたので諸賢の清覧に供したい。

抑々、北へ向かう日本海ルートにおいて敦賀津は、蝦夷対策の出発地であった。『日本書紀』によれば、阿倍引田臣比羅夫が斉明天皇四年（六五八）から三箇年、蝦夷、粛慎を討ったという。敦賀津はその拠点港だったのであろう。ちなみに、県史や市史等では殆ど触れられていないが、阿倍引田臣の名から連想されるのは、崇神天皇の世、四道将軍の一人として北陸に派遣されたと『記紀』に伝える大彦命の系譜であること。しかもその姓から敦賀の引田（疋田）郷を拠点とする豪族ではと思いたいのだが、これは専門学者の間では否定的な見解が多いようである。

中世に敦賀と蝦夷を結んだ十三湊。此処を、筆者は密かに〝北の敦賀〟と呼んでいる。建武年間（一三三四～六）、津軽安東氏の菩提寺だった山王坊阿吽寺の僧による『十三往来』には、「西ハ滄海漫々にして夷船京船群集、艫先を並べ舳を調て市を成す」という活況が描かれている。ここでいう京船とは、その大半が敦賀・若狭からの来航であろうし、また夷船には、渡島・樺太の他に、大陸から海を渡ってきた船も含まれていただろう。

昆布ルートで運ばれたものは北海の海産物だけではない。主として黒龍江下流域の（後に山丹人と呼ばれる）人々は、中国本土発の玉や錦などの〝お宝〟を齎した。

『中外抄』康治二年（一一四三）八月一日の条に「宝物袋はえぞいはぬ錦などを袋に用いるべし」とある。「えぞいはぬ錦」とは蝦夷を経由しわが国に請来した中国産の絹織物で、得ぞ言はぬ（得も言われない）と蝦夷を掛詞にした、つまり蝦夷錦を指す。

蝦夷錦は近世以降、西陣でも織られたが、そういえば、敦賀に住む私たちは知っている。毎年眼にする夷子大黒綱引のお祭りで、大黒様が纏う豪華な衣装、あれが唐織蝦夷錦と呼ばれるものだということを。

○令和七年度展示のご案内

▼一展示室

平常展示　近代の敦賀（通年）

平常展では、一部のコーナーを入れ変えながら主に敦賀近代の通史展示をしています。

ミニコーナー「戦後80年記念展」

七月一日（火）～八月二十四日（日）

戦後80年を機に戦災資料等を展示します。

▼二・三階展示室

夏季企画展

大谷吉継　生誕460周年記念展

～拝啓、四百六十の君へ～

七月十六日（水）～八月二十四日（日）

期間中には大谷吉継に関する歴史講座のまとめ『吉継カフェ記録集3』が出版され、吉継研究の最前線が学べます。

▼二階

ミニコーナー『おくのほそ道』と敦賀

八月二十七日（水）～十月十三日（月・祝）

芭蕉所用と伝わる竹杖や、蕉翁宿関係資料を紹介します。

▼三階　小テーマ展示　天狗党資料展

（「おくのほそ道と敦賀」と同時期開催）

水戸天狗党の資料を展示します。

▼二・三階展示室

特別展　つるがのみほとけ

～海辺の祈り・山里の祈り～

十月十七日（金）～十一月三〇日（日）

戦乱の被害をのがれて地域でひっそりと守られてきた仏像や仏画などを通し、敦賀の祈りの歴史を紹介します。

▼三階・コレクション展

収蔵資料公開展

～敦賀ゆかりの絵師内海三代～

十二月四日（木）～十二月二十六日（金）

近年購入または寄贈を受けた絵画を中心に、敦賀ゆかりの絵師内海三代についてご紹介します。

お正月―敦博の馬―展

十二月二十七日（土）～二月一日（日）

令和八年の干支にちなみ、馬に関連する絵画作品をセレクトし、馬尽くしのお正月展を開催します。

敦博刀剣資料公開展

二月三日（火）～三月八日（日）

毎年恒例、所蔵の刀剣コレクションを展示します。

○令和七年度イベントのご案内

天狗党・市内史跡見学ウォーキング

敦賀市内の天狗党史跡をめぐります。

十月十一日（土曜日）十三時半

定員　二〇名（要申し込み）

参加費　百円（保険料）※友の会会員様以外は四百円

特別展記念イベントみほとけウォーキング

四国八十八カ所に倣って南越前町から敦賀、三方郡までの仏像や石仏等八十八カ所の巡礼コースが幕末に整備されました。江戸時

代からあるその場所のほんの一部を巡り歩きます。ミニ講座からご参加ください。

○第１回 野坂山麓・粟野編
十一月九日（日）九時半～
会場・粟野公民館

○第２回 石仏と古の北陸道・中郷編
十一月二十三日（日）九時半～
会場・中郷公民館

各回参加費　二百円
定員　十五名程度
（要申し込み・十月一日受付開始）

「くずし字入門」（古文書講座）
十月～十二月頃開催予定

関係イベントご案内

気比史学会主催・市民歴史講座
「語り継がれる大谷吉継」
講師・外岡 慎一郎氏（元奈良大学教授）
九月十三日（土）十四時～
会場・敦賀市立図書館

当館主催の大谷吉継サミット２０２５（8/10）で話し合われた内容の、後日談が聞けるかも？

事務局長のつぶやき・・・

「敦賀のおぼろ昆布製造技術」が国の登録無形民俗文化財に選ばれました。無形民俗文化財とは、地域の暮らしに根ざした技術や知恵など、人々の営みを通じて受け継がれてきた貴重な文化遺産です。

時代の移り変わりを映し出すこれらの文化は、地域のアイデンティティを形づくる重要な要素であり、今回の登録はその継承にとって大きな支えとなることが期待されます。

敦賀は北前船によって北海道から運ばれる昆布の重要な中継地として栄えてきましたが、昆布の加工に関しては大阪や広島などが主な産地とされ、敦賀が〝主役〟とは言い難い面もありました。ところが昭和30年代、高度経済成長による都市部の労働力不足が進む中、昆布加工の現場からも人手が離れていきました。そうした逆境のなか、敦賀の業者たちは販路の開拓や技術の向上に力を注ぎ、足りない労働力を補うために、農閑期の農家や民宿の方々の協力を得ながら、地域一体となって技術の継承と発展に努めてきたのです。

こうした歩みは、地域を超えて広がっています。たとえば、昭和30年ごろに敦賀で20年以上にわたって修業し、お店を構えた職人が、その技と心を故郷・石川県能登町に持ち帰り、「大脇昆布」を開業しました。現在はその御子息が社長として、石川県唯一のおぼろ昆布職人として、地域の食文化を支えつつ、観光都市・金沢にふさわしい魅力的なお土産づくりにも取り組まれています。そこには、「おぼろ昆布職人」としての誇りと覚悟が息づいています。

現在、おぼろ昆布を取り巻く環境は、原料価格の高騰や販路の確保など、決して楽ではありません。しかし今回の登録を機に、この伝統技術が再び注目され、「おぼろ昆布職人」という職業が、若い世代のみならず、セカンドキャリアを模索する方々にとって、新たな選択肢となるのもよいのではと期待してます。

博物館友の会だより104号

令和７年８月２４日発行
発行　敦賀市立博物館友の会
事務局　敦賀市相生町７－８
TEL 0770-25-7033
FAX 0770-47-6131
E-MAIL museum@ton21.ne.jp

［編集後記］
暑いと言うのもイヤになる程の異常な暑さが続いております。敦賀の商人・大和田荘七（初代）さんの書いた明治７年７、８月頃の日記には、夏なのでやはり「甚暑」や「誠暑（まことあつし）」の文字があり、その日の気温が華氏で書かれています。「暑い」とある、ある日の温度は 89°F（華氏）⇔約 31℃、涼しいやないかい。８月５日に群馬県伊勢崎市で 41.8℃が記録されました。151 年前の荘七さんにこの話をしても、たぶん信じてくれないでしょうね（会員Ｂ）